

レジデンス・イン・森下スタジオ ヴィジティング・フェロー

アンナ・レヴァノヴィッチ パブリック・トーク

2014年2月7日(金) 19:00-20:30

スピーカー アンナ・レヴァノヴィッチ

【はじめに】

まず始めにセゾン文化財団のみなさまに御礼を言いたいと思います。ポーランドについてご紹介する機会が得られたことを光榮に思っております。

ポーランドの文化全般についてお話ししたいのですが、まずクラクフの歴史的背景についてお話しします。そして、クラクフの文化、芸術の状況や政策についてお話して、東京の文化や芸術の状況や制作について皆さんとディスカッションできればと思います。

【ポーランドについて】

まずポーランドの地理的なことから説明したいのですが、ポーランドはヨーロッパの東側にあり、東欧の様々な国に囲まれています。クラクフはポーランドの南部に位置し、人口はポーランドで2番目に多く、最も古い都市の一つです。クラクフは歴史的に学術、文化などの中心地で、経済の面でも重要なハブです。11世紀から16世紀までポーランドの首都で、数世紀間、ポーランドの国王が住んでいた街でもあります。その後、首都がワルシャワに移りますが、14世紀から18世紀の間も国王の戴冠式はクラクフで行われました。代々の国王の墓もクラクフにあるため、観光客はその墓を訪れることが定番になっています。ポーランドの中でもクラクフは文化の中心地として認識されていますが、ユネスコの世界遺産にも登録されています。旧市街には、ヨーロッパで最大規模の市場があり、王の戴冠式が行われるバベル城があります。また、クラクフにはユダヤ人も多く住んでいて、第二次世界大戦前には130ものシナゴグ(会堂)がありました。そして、旧市街には約6,000の史跡や200万以上の美術作品があり、歴史的にもゴシック、ルネッサンス、バロックなど様々な様式の建造物を見ることができます。第二次世界大戦中、様々なポーランドの都市が破壊されてしまいましたが、クラクフは幸運にも被害を受けませんでした。しかしドイツ軍に侵略を受け、その時に作られたポーランド総督府の首都としてクラクフが指定されました。占領された経験は社会に大きな影響を与えており、ドイツからポーランド人やユダヤ人は人間以下と認識され、最終的には殺戮の対象となりました。ユダヤ人はクラクフゲットーと呼ばれている地域に閉じ込められ、アウシュビッツなどの強制収容所に送られました。他の特筆すべきことは、カロール・ヴォイティワの出身地で、彼はヨハネ・パウロ2世として教皇になり、ポーランドの国民の誇りとなりました。クラクフの人口は76万人で、その他に20万人以上の学生がいます。学術の中心地でもあり、高等教育の施設が20以上あります。ヤゲロニアはヨーロッパ最古の大学の一つです。芸術教育も盛んで、ファインアート・アカデミーやシアター・アカデミーでは、俳優、演出家、ドラマトルクなど様々な人材を養成しています。

観光地としても多くの人が訪れています。2012年には900万人の観光客が訪れました。居住者が約100万人なので大変な観光地として認識されています。ヨーロッパの中でポーランドの芸術と言えば伝統のある演劇と広く知られていますが、クラクフの中で最も重要な文化は文学です。去年はユネスコから文学都市として指定されました。クラクフの歴史はノーベル文学賞を受賞した作家の人生と深いつながりがあるからです。小説、随筆、詩を書くチェスワフ・ミウォシュや、ヴィスワヴァ・シンボルスカは多くの年月をクラクフで過ごし、ヴィスワヴァ・シンボルスカの詩は様々な言語にも翻訳されています。また、ポーランドには様々な演出家がいる、有名な人だとグロトフスキがいますが、タデウシュ・カントールはクラクフに住んでいて、クリコト 2 という劇団をやっていました。彼の資料館がありますが、さらに大きな博物館が建設される予定です。

【ポーランドの文化政策】

これから、誰がポーランドの文化や芸術を作っているかという話をします。ポーランドには、公的支援を受けて設立された機関や、民間組織や団体があります。ポーランド全体で約2万の組織がありますが、文化や芸術を振興する組織や団体はそのうちの約30%です、その他に、個人や企業の活動があります。公共の助成は、国、地方、地域(市や町等)の助成があります。それ以外にも様々な国際組織、ゲーテ・インスティテュート、ブリティッシュ・カウンシル、プロヘルヴェティアなどがあります。過去10年間、ポーランドはとてもラッキーで、東欧に位置していたため優先的に支援を受ける対象となりました。他にはEUの助成があります。ポーランドは2004年、EUに加盟し、助成を受ける資格を得ました。この助成金は文化、芸術を支える基盤として非常に重要ですが、条件を満たすのが非常に困難で、例えば5つのEU加盟国が共同で行うプロジェクトでなければならないという条件があります。また、年度ごとにテーマが設けられていて、ボランティア、世代の問題などのテーマがあるのですが、助成金目当てのプロジェクトもあるため、個人的には健全な状況とは言えないと思います。助成金以外の収入では、チケット収入、レストラン、バーの経営などがありますが、これは主要な収入源にはなっていません。企業からの支援もありますがその割合はとても小さいです。米国とは異なり、ポーランドは民間企業からの支援がほとんどなく、恥ずかしいことだと思っています。昨年インターネット上でプロジェクトの資金を個人から集める動きも始まりました。個人が芸術を支援する仕組みができています。と

ポーランドでは大部分の助成が公的な資金で賄われていますが、国による文化振興の施策と地方自治体による文化振興の施策の2つの大きな枠組みがあります。一方で、過去10年間、綿密な計画に基づいた文化政策の立案が行われなかったことに、フラストレーションを感じていました。現在も地方自治体に、文化に関する施策や戦略をつくる義務はありませんが、その状況が変化している部分もあり、どのような文化や芸術を対象に支援をしていくべきなのかというガイドラインが示された施策がつくられるようになりました。その施策は、助成プログラムのためにつくられています。例えば私がディレクターを務めるクラクフのフェスティバルは3つの助成金に応募できます。国、地方、地域(市や町等)がそれぞれの独自の文化振興の施策を立案し、助成プログラムを推進しています。助成は、公的機関、民間組織や団体、例えば教会のような組織も対象になります。対象事業は

プロジェクト以外に、劇場やギャラリー建設などのインフラ整備も含まれます。個人はフェローシップに応募することができ、文化省や地方自治体のフェローシップがあります。ポーランドでパフォーマンスをしたい方は現地の組織や団体に依頼すれば、彼らが申請をして、文化省や地方自治体からの助成金を得るチャンスがあります。ポーランドの作品を招聘したい場合は、他の政府組織が海外公演をサポートしているので、そちらに申請することもできます。皆さんが直接申請することはできませんので、現地の団体を通すこととなります。助成金はだいたい1年単位ですが、最近は少しずつ変わってきて、2年とか、自治体によっては3年まで延長しているところも出てきました。ここ数年では、文化予算を増やすように要求する社会活動(キャンペーン)がありました。今はポーランド全体予算の1%以下しか文化予算がありません。クラクフには公的資金で設立された文化機関が80以上あり、そのうち11の劇場といくつかの小規模の劇団があります。また、30以上の美術館、城や国立博物館がある他、特筆すべきものとしては Manggha と呼ばれる日本美術技術博物館があります。この博物館は公立ですが、映画監督のアンジェイ・ワイダの発意により設立されました。彼は日本文化の紹介に重要な役割を担っています。クラクフには100以上のフェスティバルがあり、その半数は国際フェスティバルです。そのうち2つは演劇フェスティバルですが、ダンスフェスティバルはありません。オペラハウス、コンサートホールもあります。

【クラクフの文化政策について】

これからクラクフの文化政策についてお話します。ブレイクスルーとなったのが2000年で、EUの欧州文化首都に指定されました。毎年2都市が指定されますが、2000年は特別で、9都市が選ばれました。東欧の2都市も含まれ、当時、ポーランドとチェコはEUに加盟していなかったにもかかわらず、ポーランドのクラクフとチェコのプラハが選ばれました。9都市が象徴的に共同でヨーロッパの文化プログラムを作ることが最大の目的でした。2000年に600以上の文化イベントが行われ、市長はようやく文化事業に投資することの重要性に気づき、文化が政策において重要であると認識されるようになりました。文化首都に選ばれたことで、クラクフの文化振興の方針が明確となり、国際的なプロモーションの機会となりました。事業の1つとして、「6 senses」という6感に訴えるというフェスティバルがスタートし、現在も続いています。6 senses は様々なジャンルの芸術をカバーしています。フェスティバルの目的は、クラクフの文化を振興することと観光を活性化することでした。多くの方は、クラクフに文化遺産という過去のものというイメージを持っています。その通りですが、フェスティバルの目的はクラクフのイメージを変えることで、それは達成できたと思います。6 senses によって新しいイメージや新しいブランドを作ることができ、国際的な認知も得られました。クラクフは文学の街としても発展してきました。また、映画製作の街としても知られています。映画製作者を招いて、映画を作ってもらうことで産業が発展してきました。また様々な国際会議を招致する政策もあります。写真の会場は建設が始まっているものです。建設中ですが、2年先まで予約がいっぱいになっています。写真はコンラッド・フェスティバルという文学のフェスティバルで、国内外から作家や詩人を招く重要なイベントです。様々な国際的な文学賞の受賞者やベストセラー作家などが招待されます。イギリスのガーディアン、スイス版のクーリエ紙などに取り上げられています。文学に関連

する映画上映、展示、コンサート等、様々なイベントが行われます。もう 1 つは「サクラム・プロファイナム」、聖と俗、神聖なものど冒険というようなタイトルの音楽フェスティバルで、20 世紀音楽を特集しています。人気のグループがパフォーマンスをします。大規模なフェスティバルで、様々な会場が本来の目的から離れて使われ、工場、博物館、美術館などでも行われます。もう 1 つは「コーク・ライブ」というフェスティバルで、これも大規模で国内外から様々なミュージシャンが集まります。ヒップ・ホップ、ロックなど、サクラム・プロファイナムとは違う音楽が取り上げられます。コークという名前の通り、民間企業の支援を受けて行われます。次の写真は「ギロッシュ・ブームフェスティバル」といって、ビジュアル・アート、建築、デザインなどのフェスティバルです。公共施設で行われます。若手と年長のアーティストの橋渡しが目的です。次は映画音楽のフェスティバルで、映画音楽だけを取り上げるフェスティバルです。質の高いミュージシャンやオーケストラが映画音楽を演奏します。様々なプログラムが行われ、小さいコンサートから大規模なショーまでがあります。多くの聴衆が集まります。他のヨーロッパには見られない特別なフェスティバルです。これまでの例から、クラクフの文化政策の特徴がおわかりいただけたのではないかと思います。公的な支援は大きなフェスティバルを対象とし、観光客を増やす目的があります。クラクフはこれらのプロジェクトで非常に成功していると思います。一方で困難もあります。プロジェクトの多くは公的資金で賄われていますが、公共施設を維持するのに大部分の資金が使われています。短期的なイベントだけではなく、長期的なプロジェクトを支えることの必要性も高まっています。有名な人を呼ぶだけではなく、創作の段階から支援していこうということです。クラクフだけではなく、ポーランド全体でもフェスティバルの数が増えていて、フェスティバルの数を減らしていかなければいけないという話も出ています。もう 1 つは、地元のアーティストを支援していくことです。先ほどお話したとおり、クラクフの最大の魅力は大きな市場があることですが、文化イベントはだいたい街の中心で行われます。街の中心だけに集中してしまわないように、それ以外の場所でも文化イベントを行い、普段は芸術にアクセスできない人たちにも芸術が提供されるようなことをしていきたいと考えています。現在は支援のネットワークがないので、作っていく必要があります。以上がポーランドの文化、芸術の支援体制の概観です。

【「Krakow Theatrical Reminiscences」について】

これから私のやっているフェスティバルのお話をさせていただきます。フェスティバル名は「Krakow Theatrical Reminiscences」(クラクフ 演劇の回想)です。わかりやすい名前ではありませんが、1975 年に始まりました。ポーランドで最古の演劇フェスティバルの一つです。元々は学生が行っており、前年度に上演された演劇を振り返る、レビューするという意味で回想という名前がつけられました。初めは演劇フェスティバルでしたが、私がディレクターに就任してからダンスも扱うようになりました。パフォーマンスやビジュアル・アートも取り入れるようになりました。国際フェスティバルで、海外から招聘するだけでなく、国内の作品も上演します。2 年前、ポーランドが EU の議長国となったのですが、その時に文化プログラムを提供しました。このフェスティバルは毎年 10 月に 1 週間ほど開催され、10-15 組のアーティストが参加します。作品を招聘するだけでなく、クリエイションも支援しています。写真の時は「ポスト・ヒューマンな価値を探索する」というテーマで、ディナー

にはウジ虫などが使われています。下の写真はアートによる市内観光ツアーで、毎年行っており、ウェブサイトに MP3 バージョンがアップロードされているので、ダウンロードして観光ができるようになっています。1 週間の短い期間ですが、クリエイションを重視しています。その一環でワークショップも行います。海外からの参加者向けのワークショップで、ドラマツルギーに関するワークショップもやりました。様々な国の人たちのネットワーキングの機会でもあったのですが、このワークショップの成果を来年上演することになっています。右上がダンス・プロジェクトの写真です。レジデンシー・プロジェクトで、海外から有名な振付家を数週間招聘し、地元のダンサーや振付家とワークショップを行い、できあがった作品を上演します。このプロジェクトは、一部、EU の助成金を受けており、ラトビアとイタリアのパートナーとともに行っています。作品はポーランド、ラトビア、イタリアで上演します。今年はラトビアのリガが EU の欧州文化首都なので、リガで上演します。ウェブサイトでより詳しい情報をご覧ください。次に紹介したいのは、ドイツのリミニ・プロトコルの作品で、東京で上演された『100% トーキョー』と同じものが昨年クラクフでも作られました。普段はパフォーマンスなどを見ないような人たちを巻き込んで創作するもので、とても面白い作品でした。

(以下、質疑応答省略)